

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



元神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授

笠松 宏至

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科が「人類文化研究のための非文字資料の体系化」によって、COEに採択されたと聞いて、私は二つの感慨を覚えた。一つはこの研究科が誕生したとき、その片隅に籍を置いた一人として、何もかも不統一で不透明であったあの揺籃期を乗り越え、よくぞここまで成長されたという思いである。その成長に何一つ寄与出来なかった自分への悔悟が、その感をさらに強める。

そしていま一つは、プログラムに見える「非文字」の三文字への懐しみと憧れの入交じった一寸甘い感傷である。私は神大以前に公務として30年間、中世古文書の編纂に従事し、今も細々ながら古文書を読むという仕事を続けている。その技能のほどは別にして、少なくとも形の上では「文字」に埋没した研究人生だった。しかしある時期から、文字の向う側にある「非文字」、具体的には音声や行動に惹きつかれ、折紙訴陳状の分析から音声の世界をのぞくという、ささやかな仕事もしてみた。

一つだけ例を挙げてみよう。中世には大量の書状がつくられ、そのごく一部は公文書とは違った伝来の仕方を取りながら今に伝わった。当然ながら書状のほとんどは、私的な使用者によって受取人に送られた。多数の史料が語るように、使の「便宜」がなければ、書状を書いても詮ないことであった。そしてこの役目を担った使用者は、単なる物理的な運び屋ではなかった。これまたしばしば「委細は使申すべく候」などと記されたように、「委細」「子細」「巨細」は使の“ことば”によって伝達されたのである。一体何が文字で書かれ、何が「非文字」で伝えられたのか。

使用者はまたもう一つの意味で、単なる送り手ではない。それは「返書」の持ち帰り人という役目である。書状の行間に返意を注記する「勘返状」や、「即剋」「乃剋」と日付を記す返書の大部分は、使用者によって持ち帰られたことは確実であり、稀にはそのことを示す史料も存在する。そしてここでもまた同様の「非文字」がその役目を果たした。

何が「文字」で、何が「非文字」なのか。一見不可能に見えるこうした作業は、きわめて困難ではあるが、100%不可能ではあるまい。その手段は何か。それは、一つには「文字」をさらにさらに深く読み込むことであるが、何よりも肝心なのは、「非文字」を常に意識しながら「文字」に接するという心構えであろう。このプログラムを機会に、是非こうした研究も深めて欲しい。今はもう自分では何も出来なくなった私の願望である。